第２学年　国語科の実践

１　単元名　　「きつねのおきゃくさま」　あまんきみこ

２　単元目標

場面の様子や登場人物の行動、会話に着目して、きつねの気持ちの変容を読み取ることができる。

３　ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

研究課題･･･子どもが解決したい問題を持ち、友達とひびき合いながら学習する子どもの育成
手 立 て･･･子どもの願いや思いの育ちを見とった単元構想と授業づくり
ブロックテーマ「感じる心、素直に表現する自分」
・人の言動に何かを感じる姿　・自分の思いや他者からの刺激を受け止め、素直に表現する姿

【聴く・話すについての指導】

みんなの前で話すことに慣れるために、朝の会での「スピーチ」や帰りの会での「良いことみっけ」など、自分の考えを話したり、思ったことを伝えたりする場を設定してきた。スピーチでは、聞いている子どもが質問するだけでなく感想や自分の似た経験を話すようにすることで、話す経験を積めるようにしている。学習での話し合いでは、ネームカードを使って友達の意見を把握し、「○○さんと同じで、～です。」「○○さんと違って、～です。」と、友達の意見と比較して自分の考えを伝えられるようにしてきた。また、同じ意見でも発表しても良いという雰囲気作りをして、自分の考えに自信がなかったり、考えを持つことができなかったりする子どもも発表できるようにしている。他にも、授業の中でペアトーク、グループトークを多く取り入れ全員が発表できるような場を設定してきた。その結果、自分の考えに自信がもてるようになり、少しずつではあるが、考えを話すことができるようになってきている。ただ、声が小さいので、その都度声のものさしを意識して、大きな声を出すことができるように指導を続けている。

聴く・話すことのルールでは、目と耳と心の３つで友達の話を聴くように意識できるようにしてきた。また、クラスで「聞く・話す」についても話し合い、模造紙に書いて教室の前方に掲示し、確認をできるようにしている。他にも、席の形をグループやコの字型など、学習内容によって変化させてきた。自然に友達を見て話をしたり、聴いたりできるようにすることで、友達の考えを聴こう、友達に伝えようとする子どもが少しずつ増えてきている。

【関わり合い・ひびき合い】

これまで、いろいろな学習の中で、話し合いをしながら問題を解決したり、答えを見つけたりしてきた。子どもには、「先生は黒板メモ係。ときどき、お話していくよ。」と、自分たちが主役だということを伝えている。そうすることで、「先生に答えを教えてもらう」ではなく、自分たちで考えたり、答えを見つけたりしようという意欲が見られるようになってきた。国語の物語文では、感想交流を大切にし、その中から子どもたちが考えたいという学習問題を設定してきた。しかし、想像だけの根拠のない話し合いになってしまったり、ただの考えの発表会になってしまったりして、ひびき合うまでに至らないことも多い。全てを子どもたちだけに話し合わせるのではなく、根拠を確かめたり語句の確認をしたりすることで、さらに深く読み取り、ひびき合っていけるよう意識して指導している。また、本学級には、なかなか声を出して友だちに考えを伝えることができなかったり、大きな声を出すことができなかったりする子どももいる。そういう場合には、周りの友だちが「一緒に発表しようか。」「～って言っているよ。」と、お互い助け合いながら話し合いを進められるようになってきた。

４　単元と指導について

＜単元について＞

「きつねのおきゃくさま」は、同じ場面展開が繰り返される構造を持つ作品である。ひよこ、あひる、うさぎと順に登場人物が変わり、少しずつ内容が変化しながらも同じ場面展開が繰り返されていく。この構造は、昔話や絵本などに多く取り入れられており、子どもにとっては先を予想しやすく、展開が非常にわかりやすいものになっている。また、繰り返しの構造によって、場面ごとのきつねの行動が比較しやすく、ひよこたちに対するきつねのかかわり方が移り変わっていく様子が捉えやすい。

物語は、太らせてから食べるための「えさ」という存在でしかなかったひよこたちを、自分の命と引き替えにしてまでおおかみから懸命に守ろうとする、きつねの気持ちが変容していく姿が描かれている。このような行動をなぜきつねがとったのかを考える上で重要なキーワードとして、「やさしい」「しんせつな」「かみさまみたい」という言葉や、「ぼうっとした」「５回もつぶやいた」「きぜつしそうになった」があげられる。また、季節を表す言葉も書かれていて、長い期間きつねがひよこたちと過ごしていたことがわかる。これらの叙述から、「きつねの様子や気持ちの移り変わり」を、想像を広げて読み取っていくことができると考える。

また、主人公のきつねは最終的には死んでしまうが、「むかしむかし、あったとさ」や「とっぴんぱらりのぷう」など民話の語り口調を取り入れることによって、この作品が悲劇的なストーリーで終わらず、一つのユーモラスな民話として読み手に語りかけていることも、作品を味わう上でとても適していると考える。

＜指導について＞

子どもたちは、４月からこれまでに「スイミー」と「たぬきの糸車」の物語文を学習してきた。しかし、初発の感想を書くにあたって「なぜスイミーは赤いのだろう」「たぬきが糸車を回せるなんて知らなかった」「物語でよかった」など、物語に親しんで感想を書くことができなかった。また、物語の話し合いの中でも、「糸車を回したいからいたずらをしていた」と根拠なく想像してしまうことが多かった。そのため、「きつねのおきゃくさま」でも、物語として楽しむことができないということが考えられる。そこで、初発の感想では「きつねのこと」「きつねの気持ち」そして、「みんなで話し合いたい、わからないこと」を視点として指導し感想を書けるようにしたい。そうすることで、「ひよこたちと過ごすきつねの気持ち」や「おおかみと戦ったきつねの気持ち」、「恥ずかしそうに笑って死んだきつねの気持ち」に目を向けることができるだろう。そこで、「食べようとしていたのに、なぜおおかみと戦ったのだろう」という疑問が生まれ、「友だちと話し合いたい」という解決したい問題になると考えられる。

単元のはじめには、一人読みや語句の確認をしていきたい。一人読みをすることで、きつねの気持ちをじっくりと考えられるとともに、話し合いの中で、相手に考えを伝えやすくなるであろう。また、書き込みをすることで「きつねの気持ち」を考える上での根拠も意識できるようになっていってほしい。

さらに、この物語では、はじめは「お兄ちゃん」と言われて身震いしていたきつねが、「やさしい」「しんせつ」「かみさまみたい」と言われる中で、少しずつ「ぼうっとなった」「きぜつしそうになった」と変容していく。しかし、その反面「まるまる太ってきたぜ」という文も書かれている。また、「まだいるぞ、きつねがいるぞ。」という台詞は誰が言ったものかということも大切になってくる。この言葉を誰が言ったかによって、その場面の読みが全く正反対になってしまうこともある。おおかみが言ったと考えた場合、仕方なくきつねは出て行ったように読めてしまう。きつねが言ったことに気づけるようにすることで、きつねが自らおおかみの前に飛び出していったのだということに気づくことができる。このような一つひとつの言葉や文に着目することが、最後の「おおかみとたたかうきつねの気持ち」につながっていくのだと考えられる。

本時では、「食べようとしていたのに、なぜおおかみと戦ったのだろう」について話し合っていく。ここまでの話し合いで、きつねの変容に少しずつ気づいている子どももいるだろう。しかし、「きつねは、自分が食べる食べ物を守るために戦った。」と考える子どもも多くいると考えられる。前時までの言葉の変化や、春、夏、秋と季節が変わるくらい長い期間一緒にいたこと、「きつねがいるぞ」と自分で言って飛び出していったことを根拠としながら、きつねの気持ちが、ひよこたちが食べ物ではなく守りたいものに変わってきた、ということに気づく姿を、ひびき合いの姿としたい。

５　単元構想

2年　国語科　「きつねのおきゃくさま」

単元目標　〇場面の様子や登場人物の行動、会話に着目して、きつねの気持ちの変容を読み取ることができる。

事前の学習　「たぬきの糸車」　⇒　たぬきやおかみさんの気持ちを、叙述をもとに想像しながら読み取った。

※光村図書の、1年生（下）の教材より

★みんなで話し合うと、いろいろな気持ちがわかっておもしろいな。
★もっと、物語を読んで、みんなで話し合いをしてみたいな。

初発の感想を書くことができる（関心）

きつねのおきゃくさまって、どんなお話だろう①②

子どもの感想から、全文を通した課題を作っていくようにする。

題名読み　・きつねのところに、おきゃくさまが来るんじゃないかな。　・友だちになるお話かな。
・きつねがおきゃくさまなんじゃない？　・内容が知りたいな。

全文通読（範読）　感想を書こう・感想交流をしよう
・最後にきつねが死んでしまってかわいそうだった。　・やさしいきつねの話だった。
・きつねは、ひよこやあひる、うさぎを食べようとしていたのに、なんで食べなかったんだろう。
・もう少し太らせようとしたのかもしれない。　・守ろうとしたのかもしれないな。
・少しずつ気持ちがかわっていったんじゃないかな。
・なんで、はずかしそうに笑ってしんだんだろう。

学習問題
◆きつねの気持ちを知りたいな
◆気持ちが変わったのかな？
◆なんでたたかったんだろう

一人読みをして、きつねの気持ちを想像することができる（読む）

きつねの気持ちを考えよう③④

今までの学習をもとに、文からわかる気持ちを書き込んでいくようにする。

一人読み　きつねの気持ちがわかるところや、変わったところに線を引き、書き込みをする。

変化
・「ぶるるとみぶるいをした」⇒お兄ちゃんなんてやめてくれ。食べ物にそんなことは言われたくないぞ。
・「すこしぼうっとなった」⇒初めて言われたから、少し嬉しい感じ。

行動
・「いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ」⇒・ひよこたちは、オレが食べるんだ！
・神様みたいと言ってくれるひよこたちを守りたい。
・もう、家族だ。ひよこたちはオレが助けるぞ。
・「はずかしそうに笑って死んだ」⇒・食べようとしていたのに、やられちゃって恥ずかしい。
・食べようとしていたけど、守れて良かった。　など

語句・登場人物の確認　・主人公はきつね　・絵を見ると、山の中だと思う　・はる、なつとあるから、1年間くらいだと思う。

きつねの気持ちの変容に気づくことができる（読む）

きつねは、どんな気持ちだったんだろう④⑤⑥

言葉に着目し、少しずつ変容していくことをとらえられるようにする。

	ひよこと出会ったところで	あひると出会ったところで	うさぎと出会ったところで
きつねの裏の顔	・きつねはお腹がすいている。 ・ひよこを太らせて食べようと思っていた。 ・お兄ちゃんと言われて、はじめは嫌がっていた。 ・「まるまる太ってきたぜ」と書いてあるから、食べたい気持ちはあると思う。	・「にげる気だな」と書いてあるから、信じてないと思う。 ・あひるも食べられるぞ ・ひよこと同じように太らせて食べてしまおう。 ・「まるまる太ってきたぜ」と書いてあるから、まだ食べたい気持ちはあると思う。	・ここでもにげる気だと思っている。信じてない。 ・うさぎも食べられて嬉しいと思う。 ・うさぎも太らせれば、3匹も食べられる。 ・「まるまる太ってきたぜ」と書いてあるから、それでも食べたい気持ちはあると思う。
きつねの変容	・優しいといわれて、「ぼうっとなった」と書いてあるから、少し嬉しい。 ・2回もぼうっとなっているから、ここで気持ちが少し変わったと思う。	・「しんせつなきつね」と5回もつぶやいていると言うことは、嬉しいんだと思う。 ・だから、親切にしてあげている。 ・「ぼうっとなった」から、ひよことあひるへの気持ちが変わってきていると思う。	・うっとりして、気絶しそうになったんだから、食べる気持ちはなくなってきていると思う。 ・かみさまみたいにそだてたということは、食べる気持ちはなくなってきてる。
	着目する言葉 ・ぶるるとみぶるいした ・少しぼうっとなった ・心の中でにやりとわらった ・ひよこは、まるまるふとってきたぜ	着目する言葉 ・うっとりした ・5回もつぶやいた ・ぼうっとなった ・あひるも、まるまるふとってきたぜ	着目する言葉 ・うっとりして ・気ぜつしそうになった ・ぼうっとなった ・うさぎも、まるまるふとってきたぜ

きつねの気持ちの変容に気づくことができる（読む）

おおかみとたたかった　きつねの気持ちを考えよう⑦⑧本時

「食べるため」に育てたが、「守りたい」という気持ちに変わったことに気づけるようにする

・大切に育ててきたひよこたちが食べられちゃうから、助けたんだと思う。
・自分で食べようと思って育てていたのに、オオカミにたべられるのは嫌だから出て行ったんだと思う。
・助けたんじゃなくて、食べるために守ったんだと思う。

⇔

・はじめは「やさしい」なんて嫌だったんだけど、少しずつ優しくて親切な自分が好きになった。
・育てているうちに、家族みたいに思ったと思う。
・育てていると、好きになってくるよ。
・今までのことが嬉しくて、きつねの気持ちも変わった。

はずかしそうにわらったきつねの気持ちを考えよう⑧

ひよこたちの行動もおさえ、きつねの気持ちを考えることができるようにする

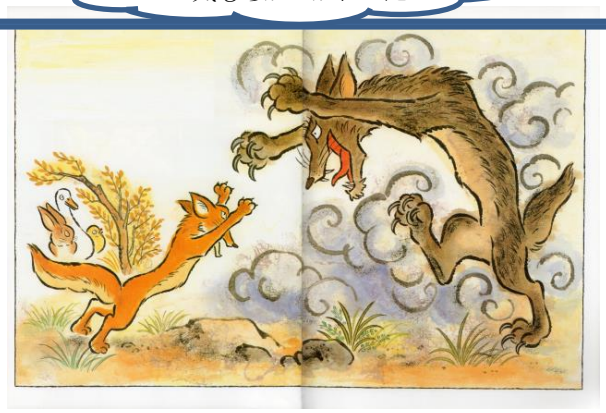
・食べようとしていたのに、やられちゃってはずかしいな。　・負けてしまって、はずかしいな。
・「ありがとう」なんて言ってもらって、初めてではずかしいな。　・いいことをして、照れてしまうな。
・看病してもらって、うれしいな。　・みんなが助かってよかったな。　・みんなを助けてよかった。

きつねに手紙を書こう⑨

６　本時について

（１）本時目標　読み取ってきたことをもとに「たべようとしていたのに、なぜきつねがおおかみとたたかったのか」を話し合うことで、きつねの気持ちが変容していることに気づくことができる。

（２）本時展開

学　習　活　動	主な支援・留意点　◆評価【観点】
1　本時のめあてを確認する たべようとしていたのに、なぜたたかったのだろう。 たべたい ひよこは、まるまる　ふとってきたぜ あひるも、まるまる　ふとってきたぜ うさぎも、まるまる　ふとってきたぜ せっかく太らせたひよこたちをわたしたくない。 ひよこにあひる、うさぎはおれが食べるんだ。 そだてたのは、おれだ。だから、食べるぞ。 食べたいから、まもる。 きつね 「いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ。」 ゆうきが　りんりんと　わいてきた じつに、じつに、いさましかったぜ はじめは食べたかったけど… ずっといっしょにいたから、まもりたい。 もう、かぞくなんだ。 もっと、ほめてもらいたい。 たすけたい やさしい　おにいちゃん しんせつな　おにいちゃん かみさまみたいな　おにいちゃん 気もちが　かわった  2　学習の振り返りをする 今日の学習の感想を書こう ・ひよこたちをたすけるためにたたかったということがわかった。 ・考えが変わって、きつねはひよこたちをかぞくだと思っていたとわかった。	○　今日話し合うことについて確認することで学習意欲を持てるようにする。 ○　丸読みをして、本文の内容を確認する。 ○　全体で話し合う前に、近くの友だちと意見交流をすることで、自分の考えに自信を持てるようにする。 ○　発言がない子どもは意図的に指名し、発言がつながるようにする。 ○　名前カードを用いて、誰の考えか明確にする。 ○　クラスの「聞く・話す」を意識できるようにする。 ○　変容に気づくことができなかった場合には、「いや、まだいるぞ。…」と、自ら出て行ったことを確認することで、気づけるよう促す。 ○　「食べたいから」「助けたいから」という考えの違いがはっきりわかるように、整理して板書する。 ◆　叙述をもとに読み取ってきたことを、話し合おうとしている。 【関心・意欲・態度】 ◆　きつねの気持ちの変容に気づいている。 【読む】

７　実践を終えて

≪単元について≫

本単元では、子どもの初発の感想から学習問題を作っていった。たくさんの感想が出たが、その中で子どもが特に話し合いたいと問題にしたのは、「きつねは、なぜおおかみとたたかったのだろう」「きつねの気持ちが少しずつかわっていく」という感想である。その二つの問題を中心に、場面場面のきつねの気持ちを追っていった。感想で、「きつねの気持ちが少しずつ変わっていく」と出ていたので、子どもが考えた「食べたいメーター」を元に、食べたい気持ちがどのくらいあるのかも話し合っていった。きつねの気持ちを表すのに重要な「キーワード」を意識して話し合えるようにしたのだが、話し合えば話し合うほど、場面の最後にある「〇〇はまるまる太ってきたぜ」という文章から、「やっぱりきつねは、自分の食べ物を守るために戦ったのではないだろうか。」と考える子どもが増えていき、「命を守るために戦った。」という考えの子どもは少数だった。

≪子どもの解決したい問題となったか　について≫

「どうして、きつねはおおかみとたたかったのだろう」という学習問題は、子どもにとって解決したい問題となったと考えられる。ただ場面を追い、登場人物の気持ちを考えるだけでなく、感想から子どもが自ら問題を考え、子どもの考えた「食べたいメーター」を元に話し合うことで、「もっと気持ちが知りたい。」という思いにつながっていった。子どもからでた言葉を「問題」としていくことが、子どもの解決したい問題になったと考えられる。

また、本時は、「なぜ戦ったのか」という学習問題を元に、話し合いを進めていった。「食べ物を守るため」という考えと「命を守るため」という二つの考えの違いがあるため、「どうしてなのか知りたい」「友だちの考えを聞いてみたい」そして、「解決したい」という思いになっていった。

≪ひびき合いについて≫

本時では、「食べたい」と「助けたい」それぞれの考えについて話し合っていった。はじめは「助けたい」と考えている児童は数人で、大多数は「食べたい」という考えであった。このままの話し合いでは、児童が変容しないと考え、話し合いの中で「いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ。」というきつねの言葉を取り上げることとした。タイミングを考えてこの言葉を出し、さらにペアトークを入れてもう一度立ち止まれるようにすることで、考えが「食べたい」から「助けたい」に変容する児童が出てきた。ここで、変容した児童を意図的に指名したが、それがきっかけにもなり、「私も考えが変わって…。」「ぼくも…。」と、変容したことを伝える児童が増えてきた。

しかし、この話し合いのポイントで出てきた「戦うように見せかける」「命がけ」という言葉で立ち止まることができなかった。もう少しこの言葉で立ち止まり、みんなで考えたり、動作化をしたりすることで、最後まで「食べたい」と考えていた児童も変容できたのではないだろうか。また、ひよことあひるとうさぎの３匹が見守っている挿絵がある。おおかみの気持ちだけではなく、その３匹の気持ちにも触れることで、「ゆうきがりんりんわいてきた」という言葉にも繋がり、３匹に応えようとするきつねの気持ちを読み取れたと考えられる。

≪成果と課題について≫

「きつねのおきゃくさま」は、同じ場面展開によりきつねの行動や気持ちを比較しながらも、「なぜ戦ったのだろう」という疑問を持って学習を進めていくことができ、内容や展開を理解しやすい教材である。この単元では、子どもの感想から、子どもの言葉で学習問題を作っていくことが、解決したいと考える問題になっていったと考えられる。

本時の話し合いでは、立ち止まる時間を作り、ペアトークを取り入れたり本文に戻ったりした。その教師の出所は有効で、ひびき合い、変容していくために有効であった。しかし、話し合いが進んでいく中で出てくる子どもの言葉に立ち止まることが足りず、課題となった。教師がどんなキーワードが出てくるかを予想し、どの言葉を拾って立ち止まるかを考えておくことや、話し合いの中で出てきた言葉はどのような意味なのかをもう一度問い、全体で共通理解し、考えを広めていく必要があることがわかった。今後は、教材研究の中でどのようなキーワードで立ち止まるかを深く考えると共に、子どもを見取ることで発言を予想していきたい。そして、授業展開の中で立ち止まる場面を作って考えを広め、深めていくことができるようにしたい。